

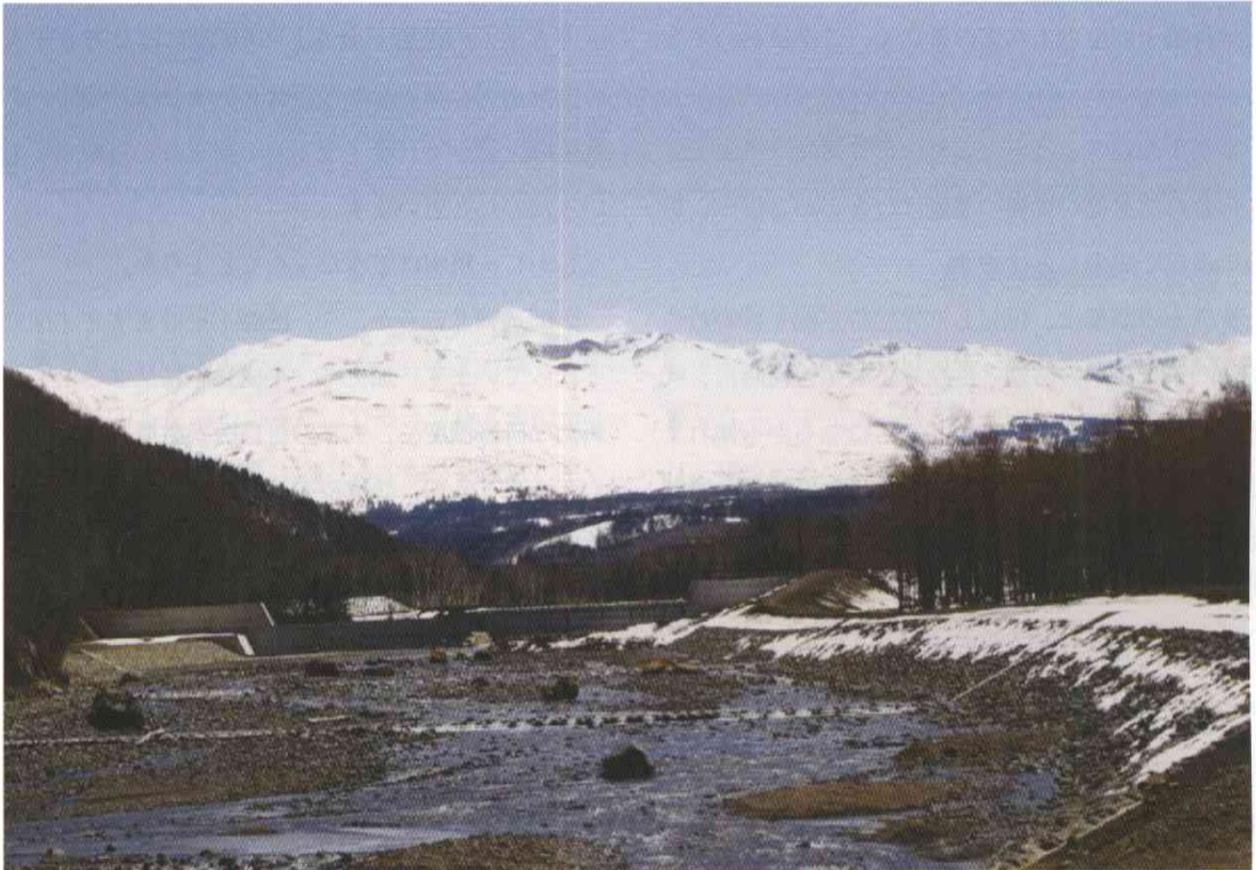


(題字は初代学長 山田守英氏)

第 136 号

平成21年3月24日

編集 旭川医科大学
発行 教務部学生支援課



白金より望む十勝岳 (美瑛町)

(写真撮影：学生支援課)

「高い志、深い配慮」をそして堂々とした 「人前力」を……………	吉田 晃敏……………2
医学科第31期生に送る言葉……………	柿崎 秀宏……………4
看護学科第10期生を送るにあたって ……………	木村 昭治……………5
卒業にあたって……………	伊尾 紳吾……………6
卒業にあたって……………	田川 晃司……………6
卒業にあたって……………	中山真規子……………7
医学科第31期卒業生名簿……………	……………7
卒業にあたって……………	木村喜美子……………8
卒業にあたって……………	小山 知美……………8
看護学科第10期卒業生名簿……………	……………9
平成20年度修士・博士学位記授与者名簿……………	……………9
一年を振り返って……………	菅場 幸太郎……………10
一年を振り返って……………	小田 虎賢……………10
一年を振り返って……………	黒木 香織……………11

一年を振り返って……………	杉岡 詩織……………11
定年退職にあたって……………	小川 勝洋……………12
定年退職にあたって……………	葛西 眞一……………13
退職にあたって……………	田中 達也……………14
最終講義……………	……………15
外国人留学生冬季交流事業……………	……………15
平成20年度 1年のあゆみ……………	……………16
各種保険について……………	……………18
平成21年度日本学生支援機構奨学生の募集……………	……………18
平成21年度前期分授業料免除及び延納・分納について ……	……………18
授業料未納による除籍について……………	……………19
新入生歓迎合宿のご案内……………	……………19
訃報……………	……………20
教員の異動……………	……………20
学生団体の「継続届」「設立届」の提出について ……	……………20
貴重品保管庫を設置しました……………	……………20



「高い志、深い配慮」 そして堂々とした「人前力」を

学 長 吉 田 晃 敏

医学科第三十一期生百一名の皆さん、並びに、看護学科第十期生六十八名の皆さん、ご卒業おめでとう。

卒業生の皆さんはもとより、皆さんを今日まで育てられたご父母の皆様の感慨はひとしおと思い、重ねてお祝いを申し上げます。

皆さんの卒業は、折しも世界同時不況と言われる空前の景気後退の時期と重なり、卒業と同時に、吹き荒ぶ荒波に大きく揉まれることになるかも知れません。その点で皆さんは、先の見えない時代の狭間で、漠とした不安を抱いているのではないのでしょうか。

思い起こしてみますと、今から36年前、本学が産声を上げた昭和48年当時もまた、変動為替相場への移行とオイルショックが重なり、狂乱物価へと突き進みつつありました。そして、庶民の暮らしは、瀬戸際まで追い詰められつつあり、極めて厳しい時代でした。当時は、また、「医療格差」が、今よりはるかに大きく取り上げられておりました。

その様な時期に、「地方医療の新たな担い手」を育成しようという、国の確固たる方針のもと、旭川医科大学は誕生したのです。「医療格差解消」の、言わば「希望の星」として本学が誕生したといっても過言ではありません。不安な時代の風を背に受けながらも、他方で、大きな希望を胸に大学の門をくぐった第一期生の一人が、この私でした。

以来36年。その間も大学の歩みは決して平坦なものではありませんでした。今から10年程前には、

医師過剰論がまことしやかに登場し、「10年後には1万5千人の医師が余る」「30年後には2万6千人の医師過剰となる」などと言われました。当時の卒業生は、恐らく、大きな不安を抱えながら旅立っていったのだと思います。

しかし、現実はどうだったのでしょうか。

医師過剰どころか、今、医師不足はますます深刻となっています。加えて、平成16年にスタートした新たな研修制度で、大学の研修医が激減し、道内でも至るところで、診療科の休診が相次いでいます。政府は、目の前で起こっている深刻な医師不足を見て、ようやく方針を転換し、医師の増員へと舵を切りました。また、皆さんの期から、本学で研修を受ける方々には、2年間の内、1年以上の期間、将来の専門科を選択出来る「特別コース」が認められました。

一方、看護師不足もまた深刻です。入院患者7人に対し1人の看護師配置が最も理想的だとする、いわゆる「7:1体制」を国が推奨した事で、看護師のニーズは一気に高まり、その結果、看護師不足も全国で大きな問題になっています。

このように見ていきますと、確かに今は、不安定な時代に突入していますが、医師そして看護師へのニーズは、逆に高まりつつあるのです。

医療人を社会へと送り出す我々大学にとっては、この医師不足、看護師不足という現実を見据えながら、地域医療の質をいかに守るかという点が、いま、喫緊の課題となっています。

旭川医科大学では、卒業後に本学で医師の初期研修を行う方に対しては、その間、月額20万円を貸与し、将来、地域の病院に同じ期間勤務した場合には、貸与金の返還を免除する制度を去年4月にスタートさせました。本院に勤務する看護師に対しては、病院外での研修費用の全額を大学が負担しています。これらはみな、他の国立大学病院でも例がない優遇策で、大いに成果を上げています。さらに、安心して出産、育児及び介護が出来る「復職・子育て・介護支援センター」(略称「二輪草センター」)を設置。従来の夏休み休暇を「リフレッシュ休暇」と名称を変え、1年中いつでも取得できるようにするなど、待遇面での改善にも力を入れています。

これらの制度改革、並びに、地域枠など数々の「入試改革」を通じて、北海道の地域医療に取り組む医師・看護師を、旭川医科大学が責任を持って育てていくのだという熱いメッセージを、内外へ示すことが出来たと、学長として、自負しております。

いま、皆さんの眼前には、医師そして看護師として活躍できるステージが広がっています。そこで問われるのは、医療人として、ひとりの人間としての力です。「高い志」を決して忘れず、同時に、「深い配慮」を欠かさない医療人に成長してください。志の高さが、皆さんの将来を決するはずです。他方で、患者やその家族、あるいは共に働く者への配慮の深さが、皆さんの、医療人としての価値を高めるでしょう。

そして、もう一つ。私が特に今、大切だと考えているのが「人前力」(ひとまえりょく)です。人前で明確にプレゼンテーション出来る力が、「人前力」ですが、これはビジネスの世界に限った話ではなく、医療界にとっても、極めて重要な能力だと私は考えています。「医療の信頼を取り戻す」ため、公式の場で堂々とした態度をとれる力は、極めて重要で

し、患者に対し、医師として明確な治療指針を示す力の有無も、今後ますます問われることになると思います。

私は学長として、皆さんが学んだここ旭川医科大学を、皆さんが益々誇れる大学へと飛躍させていくことをお約束します。皆さんも、医学・看護学・医療の実践の場において、「高い志」そして「深い配慮」を忘れない、堂々とした「人前力」を持ち合わせた医療人に成長されることを、心から期待しています。

母校に残られる方々とは一緒に、母校の改革を進めていきましょう。母校を離れる方々とは、近い将来、改革後の母校で一緒に働けることを心から待ち望んでいます。

残る者・旅立つ者、それぞれにとって、ここ旭川医科大学は、昨日も今日も、そして明日も、皆さんの母校です。

今後のご活躍を心から願っています。





医学科31期生に送る言葉

医学科第6学年担当 柿崎秀宏

皆さん、卒業おめでとう。旭川医大における6年間の学生生活では、怪我や病気をしたり、精神的に落ち込んだり、いろいろな苦労があったと思います。各人の努力、精進の結果として、そしてご両親からの支援のお陰で無事に卒業できたことを心から祝福します。6年間の学生生活を支援してくれたご両親の心労は、大変なものであったと思います。今一度、ご両親に心からの感謝の言葉を伝えて下さい。

医学科を卒業し、国家試験を終え、これから医療者（あるいは基礎研究者）を目指そうとしている皆さんの胸中を満たしているのは、どんな感情でしょうか？将来への不安、希望、成功への期待、友との惜別の悲しみ、社会への憤り、病める人への同情など、さまざまな要素の感情が皆さんの心を満たしていると想像します。社会人として生活していく中で、ある感情は薄れ、別の感情は強化されていくことでしょう。学生から社会人となるこの人生の大きな転換点を心の原点として、これからの自分の成長と変化を常に比較しながら、自分自身の人生を展開して欲しいと願っています。

学生時代は、全員が同じ教育課程を受けます。しかし、これから何を、どのように、どこまで学ぶかは各人次第です。医学科での学業成績は忘れて、心をリセットして下さい。これからが本当の勉強で、これからが勝負です。多くの経験と高度な知識・技術に裏打ちされた臨床医・研究者になって下さい。

クールな頭を持ちながら、病める人の気持ちを理解し、忘れない人間性豊かな臨床医・研究者になって下さい。各人が進む道は、それぞれ異なりますので、他人の成果や成功に気を取られることなく、自分の道を切り拓いて下さい。

医療者・研究者としての仕事は、楽しいことばかりではありません。苦しいこと、つらいことも多く、失敗はつきものです。でも、人生は楽しいです。いつも明るい心持で、困難を乗り越えて下さい。自分が日頃大切にしている2つの言葉を皆さんに送りたいと思います。それは、sagacityとprobityという言葉です。sagacityとは健全な判断力であり、probityとは高潔さ、心が高く、清廉潔白であることを意味する言葉です。個人として、医療者として、社会人として、このsagacityとprobityを大切にしながら、これからの人生を送って下さい。

学年担当主任として、31期の皆さんとの交流は十分ではなかったと自省しています。卒業して20年あるいは25年位たつと、社会的にも落ち着き、そろそろ同級生が集まりたくなる時期です。卒業後20年あるいは25周年記念の同期会が開催される場合には、是非私にも声を掛けて下さい。立派に成長した皆さんと再会できることを楽しみにしています。

医学科31期生の皆さん、卒業おめでとう。

(泌尿器科学講座 教授)



看護学科第10期生を送るにあたって

看護学科第4学年担当 木村 昭 治

看護学科第10期の皆さん御卒業おめでとうございます。4年間の研鑽と努力にまず敬意を表したいと思います。今皆さんが入学した4年前のことを思い出しています。ご父兄を前にして2つの希望について話したことを憶えています。まずこの貴重な4年間を何よりも楽しく過ごせ旭川医科大学で過ごせたことが良かったと思えること、一方で資格として国家試験に合格する能力を身につけること、でしたが今それが現実のものになり大変うれしく思っています。

免疫反応で主となるものは適応性免疫とよばれ、異物を認識するリンパ球集団が遺伝的に固定されたものではなくそれを基礎としながら環境に応じて変化する、つまり「可塑性」を持っていることが特徴ですが、最初の適応はほ乳類では胸腺で行われるということをもまだ憶えていると思います。リンパ球集団が胸腺で正および負の選択を受けるがごとく皆さんは今、大学という胸腺の場で周囲から強い影響を受けながら分化・成長を遂げました。胸腺（大学）を出て末梢（社会）に出ようとするナイーブなT細胞のようですが環境次第で十分な能力を発揮することが出来ます。それらは今後様々な刺激を吸収しながら同様の状況に対峙したときには、まさに記憶T細胞の如く少しのくゝもなく正確にかつ迅速に対処する能力を身につけていくことでしょう。しかしながらT細胞と皆さんとの違いもあります。T細胞には自発性はありません。たくさんのクローンがそれぞれ環境に応じて変化し全体として個を形成するものです。皆さんは大学では「自ら考え、自ら解決策を探り、それを実行する行動力を身につけること」を常に要求されて来ました。その結果環境に適應するのみならず逆に環境に働きかける能力も身につけたことと思います。

私は以前この「かぐらおか」に新入生歓迎文の中

で医療人のプロ意識について書きましたが皆さんにはプロフェッショナルの自覚を持っていただきたく再度書きます。私は研究者という立場にありますが、いい研究者とは24時間研究のことを考えることの出来る人であると考えています。これを医療現場にあてはめると、いい医療人とは24時間患者さんのことを考えることの出来る人と言えます。これは易しいことではありませんが医療は命がかかっている特殊なものであって、患者さんは命をかけて皆さんを頼っていることを忘れてはなりません。それに対しては皆さん方にはいささかの甘えも許されず、同じく命がけで対峙するしかありません。技術何よりもまずこの意識を持っていることにより皆さん方は尊敬されるはずのものなのです。プロ意識の継続には「常住死身」の精神で日々自身を鍛錬し続ける必要があります。

看護学も時代の要請や社会情勢の変化に従い変わり得ます。医療・福祉制度や保険制度も変わるし、実際に大学に於けるカリキュラムの変更は頻回に行われ現在もより時代に即した方向に向け検討が続けられています。しかしながらそれらがいくら変わろうとも看護の基本精神は変わることなく、又皆さん方は今やいくらかの問題解決能力を身につけています。従って時代がこれからどのような方向に向かおうともその能力を現場で発揮すれば難局があってもなんら恐れることなく前進していけるでしょう。私は昨年交通事故で大学病院に2ヶ月足らず入院しました。その際本学の卒業生に看護していただきましたがそこにはもう私が病理など講義していたころの姿は微塵もなく澆漓と的確に動くまさに看護師の姿がありました。今、数年後の皆さんの姿をそれに重ねて想像しています。皆さんのご活躍をお祈りします。

卒業にあたって

医学科第31期卒業生 伊尾 紳 吾



ハプニングにより、病室から3日間通った国家試験を終え、少しほっとしている。最善の策を考えてくださった先生方、支えてくれた同期や後輩達への感謝の気持ちが試験問題に向かう自分を後押ししてくれた。

6年間の大学生活を振り返ってみると、楽しいことや辛いこと、たくさんの思い出があり、どれも旭医に入学し、ここに集う仲間達がいなければ出来なかった思い出ばかりである。「出会い」は大切だとしみじみ感じる。

また、勉強、部活、趣味、どんなものでも良いから真剣になって取り組めるものを見つけ、本気で継続することも大切だと思う。何かを継続していれば、かならず大きな難題に直面する時がある。その時に自分自身でしっかり考え、周りの人達と話し合い、

解決策を見つけ出す。難題を前に諦めてしまって後悔するよりも、失敗を繰り返してでも難題への挑戦を継続し達成できた時、それは必ず人生の糧となり、今後、困難に立ち向かう時に、応用が利くかもしれない。周囲が勉強していることに焦りを感じつつも、アイスホッケー・水泳という運動系部活を6年間最後まで継続したことに全く後悔はなく、満足している。学生時代にしかできない部活に入り、その中でたくさん得るものがあったのだから。

今やりたいこと、今やれること、今やらなければいけないことを考えて、今を大事に生きれば、きっと充実した毎日を楽しむことが出来るはず。

それを教えてくれたのは旭医!!

「旭医で良いんです。旭医が良いんです。」

自分にかけがえのない6年間を与えてくれた旭医。実習等で熱心に教えてくださった先生、共に喜びを分かち合い、辛いときは励まし合って多くのことを一緒に乗り越えてきた同期、部活の先輩、後輩、学校関係者の皆さん、「どうもありがとう」

今後は感謝の気持ちを全力で還元していきたい。最後にもう一言
そう!! 「旭医が良いんです!!」

卒業にあたって

医学科第31期卒業生 田 川 晃 司



医師としての人生を歩み始めるにあたり、ふと旭川医大で過ごした六年間を振り返ると、たくさんの思い出が昨日のこのように蘇ってきます。

私が医師を目指したのは中学生のとき、かかりつけの小児科の先生にあこがれたからでした。その志を胸に、六年前旭川医大の門をたたきました。大学では勉学にも、部活動である弓道にも熱中し、非常に充実した毎日を過ごせました。あっという間に六年が過ぎ、気がつけばもう卒業か、という気持ちでいっぱいです。

充実した学生生活を送れたのも、多くの方々の支えがあったからでした。遠く旭川の地で医学の勉強をすることを支え続けてくれた両親や家族、まったくの初心者であった私を熱心に指導してくださった弓道の師範の先生や先輩方、主管になった地区体の

運営に協力してくれた部活の同期や後輩たち、国試対策委員長の私を支えてくれた国試対策委員の仲間やクラスメイト、忙しい中指導してくださった臨床の先生方、体調がすぐれない中で私の実習に協力してくださったたくさんの患者さん、実験・実習などを通して具体的な将来像を描かせてくれた小児科の先生方…。この六年間たくさんの方々にお世話になりました。この場を借りてお礼申し上げます。これからはお世話になった分を精一杯還元していこうと考えています。

まだまだ医師としてのスタートラインに立ったばかりですが、これからは旭川医大で得たたくさんの宝物を胸に、あの時あこがれていた小児科の先生のように、子どもたちに夢を与えられるような小児科医として過ごせるように日々努力していきます。その道のりは決して平坦ではないでしょうが、つらくなったときには旭川医大で過ごした、大変だったけれども思い出多くて楽しかった日々を思い出して、乗り越えていきたいと思います。六年間いろいろとお世話になり、本当にありがとうございました。

卒業にあたって

医学科第31期卒業生 中山 真規子



長いようであっという間だった6年間を振り返ってみると、やはり5年生から始まった臨床実習が強く印象に残っています。患者さんと実際に触れあい、先生方の仕事ぶりを間近に見て、医師という仕事、その在り方について考える

きっかけとなりました。

実習で患者さんによく言われたのが「頑張って良いお医者さんになってね」という言葉です。私はそう言われるたび、モチベーションが上がると同時に「良い医者ってどんな医者だろう？何を頑張れば良いのだろう？」と疑問に感じもしました。

前々から私は「広い視野を持った医者になりたい」とは思っていました。どうしても単科大学では世界が狭くなってしまう気がして、学外でバイトや趣味活動をしたり、一人旅をしたり、それと同時に大学

も好きだったので部活にも励み、委員の仕事も色々やり、友達とたくさん遊んで学生ライフを満喫しました。どれも大切な思い出です。「もちろん勉強も必死でやりましたとも！」定期試験も国家試験も、もう2度と受けたくありませんが……。

こんなに充実した大学生生活を送れたのは、この旭川で出会えた多くの人たちのおかげです。特に同期とは6年という長い期間を共に過ごしてきました。当たり前のように毎日大学に通い毎日友達と会えた日々が、かけがえのない日常でした。卒業してばらばらになってしまうのは寂しいけれど、旭医の卒業生として各地で活躍してくれることを願っています。私も負けじと、この先も「良い医者とは何か？」を考え続けながら頑張っていきたいです。

最後に、いつも温かく見守ってくれた家族とお世話になった大学や関連病院の先生方、職員の方々、本当にありがとうございました！後輩のみんな旭医での毎日を悔いの無いよう大切に過ごしててください。

この6年間は、とても楽しくて実りあるものでした。今、そう思えることが幸せです。

卒業にあたって

看護学科第10期卒業生 木村 喜美子



国家試験を終えて少しほっとした今、改めて『卒業』について考えると、「早いなあ…」という寂しい気持ちと、小さい頃からの夢だった保健師として働けるという喜びとが混在し、複雑な気持ちになります。春からは4年間お世話になった旭川を

離れることとなり、当たり前だった学校への道のりも、プラタナス通りのきれいな並木の紅葉も、旭川の厳しい冬に見た澄んだ空に光るたくさんの星も、とてもいとおしく思えてなりません。

私の大学生生活4年間は、入学する前に勝手に持っていた大学生のイメージである『自由で気ままな生活』とは大きくかけ離れていて、とても忙しく充実した毎日でした。講義に参加し知識を得たり、実習では患者さんを受け持たせて頂いたことで、疾患や看護過程の学習になったばかりではなく、様々な人

生観に触れることができました。市町村・保健所実習では、集団に働きかけることや、仲間と協力して1つの大きなものを作り上げることの難しさを学びました。卒業研究では、1つのテーマについて深く探究することの楽しさを知りました。勉強ばかりではなく、2つの部活動に参加し、運動が苦手な私でしたが、大学に入って初めてテニスに挑戦し、運動することやチームプレーの楽しさを感じることができました。また、年2回の合唱部の病院コンサートでは、入院患者さんや他の観客の皆さんと歌を通して一緒に楽しい時間を過ごすことができたと思います。

このような忙しくても毎日が充実していて楽しかった旭医での生活が、私を成長させてくれたと感じます。しかし、それは決して自分だけの力ではなく、先生方、友達、部活の仲間、家族などの大きな支えがあったからこそいうことを強く感じ、心から感謝しています。これからは大学での思い出を大切にしながら、周囲の支えに感謝する気持ちを忘れずに、多くの人に元気を与えられるような人になれるよう日々邁進していきたいと思います。

卒業にあたって

看護学科第10期卒業生 小山 知美



助産師になるという夢をみて、憧れであった旭川医科大学に入学してから今まで、本当にあっという間の4年間でした。ただ目の前のことをこなすことで精一杯であった私は、立ち止まって振り返ることもなく、この時を迎えてしまった気がしま

す。まだ、卒業するという実感はありませんが、今こうして改めて卒業することを考えると、当たり前だと思っていた何気ないすべてが愛おしく感じます。この4年間で多くの素敵な出会いがあり、多くのことを学ばせていただきました。4年間を構成するすべてが今の私にとってかけがえのないものであり、私を成長させてくれたのだと思います。

その中でも、6週間旭川を離れてホテルで共同生活をした分娩介助実習は、特に心に残っています。生命の誕生に感動し、助産師という職業への憧れは

強くなる一方で、自分の未熟さを実感し、夢を見失いそうになった時もありました。自分が選んだ道だったはずなのに、弱音を吐いたこともありました。そんなとき、いつもそばには仲間がいてくれました。そして、旭川から応援してくれる同期のみんなの存在が私を支えてくれました。本当に、みんながいてくれたから乗り越えることができたと思います。また、そんな私を快く受け入れてくださった産婦さんやそのご家族、知識や技術を授けてくださった教員やスタッフの方々には、心から感謝しています。今、全ての実習を終えて、この道を選んで本当に良かったと思っています。

この4年間は楽しいことも辛いこともいっぱいありましたが、今振り返ると、充実した大学生活でした。旭川医科大学に入学し、素敵な仲間恵まれ、私は本当に幸せであったと心から言えます。4年間ずっと一緒に頑張ってきた仲間たちは、かけがえのない宝物です。これからも人との出会いを大切に、一日一日を大切に、笑顔で過ごしていきたいと思

います。私の選んだ道を応援してくれた多くの方々心から感謝しています。本当にありがとうございました。

旭川医科大学大学院医学系研究科 学位記授与者名簿

平成21年3月25日付

氏 名	課程・論文の別	専 攻	学 位
助 川 妃 佐 子	修 士 課 程	看 護 学	修 士 (看護学)
吉 田 紀 子	修 士 課 程	看 護 学	修 士 (看護学)
笹 川 朝 子	修 士 課 程	看 護 学	修 士 (看護学)
佐 藤 慶 如	修 士 課 程	看 護 学	修 士 (看護学)
森 浩 美	修 士 課 程	看 護 学	修 士 (看護学)
横 山 詞 果	修 士 課 程	看 護 学	修 士 (看護学)
中 村 和 正	博 士 課 程	生体情報調節系	博 士 (医学)
磯 江 つばさ	博 士 課 程	生体情報調節系	博 士 (医学)
細 木 卓 明	博 士 課 程	細胞・器官系	博 士 (医学)
十 川 健 司	博 士 課 程	生体情報調節系	博 士 (医学)
刘 晓 宇	博 士 課 程	細胞・器官系	博 士 (医学)
遠 藤 整	博 士 課 程	人 間 生 態 系	博 士 (医学)
鎌 田 晋 輔	論 文 博 士		博 士 (医学)
沼 田 篤	論 文 博 士		博 士 (医学)
相 沢 圭	論 文 博 士		博 士 (医学)

一年を振り返って



医学科第1学年 萱場 幸太郎

先日、旭川医科大学の前期入学試験が行われました。緊張してこわばる受験生の顔を見ながら、自分がAO入試で単身旭川に乗り込んできたときのことを思い出していました。あのとき、自分が旭川医科大学の入試を終えてから、早くも一年が経過していることに驚きを覚えます。様々な行事・イベントにもみくちゃにされつつ過ぎた怒涛の一年でしたが、自分には本当によいものでした。

春先、自分を取り巻く環境が一変し、多少なりとも不安に駆られていたこの時期。自分と同年代の人もいれば、自分の倍以上生きている人がある。そんな人たちが同じ講義室で、同じ講義を聴いている。高校生活では考えもしなかった日常の変化でしたが、案外すんなりと対応できた気がします。それは他でもなく学友の存在があったからだと思います。

一年を振り返って



医学科第1学年 小田 虎賢

関西人である私は、4月なのにまだ雪が残っている旭川に驚きながら入学式の会場へ向かっていたのが一年前。AO入試で受験し合格を知ってから入学までの半年もそうでしたが、友人が誰一人いない土地での生活への心配や医学の勉強に対する不安を抱えながら、私の旭川医科大学での学生生活は始まりました。

入学当初から先輩方には優しくしていただき、またよき友人にも恵まれたおかげで春から充実した生活を送ることができました。この大学には、別の大学を途中でやめて来た人や、大学院まで卒業してさらに社会人を経験してから来た人など、日本各地からいろんなバックグラウンドを持つ人間が集まっています。自分と全く違う経験を持つ人達から学ぶことは多く、一年間で自分を人間として成長させる大きな糧になりました。また、高校二年生の時にやめた陸上競技を再開し始めた時にも先輩方からのアドバイスが活きました。いろいろな方々に支えられたおかげで、一年生で東医体優勝を経験することができ、また大好きなスキーを思う存分楽しむことがで

医師に必要なコミュニケーション能力や体力などは、部活動や、医大祭などのイベントで習得せんと頑張っています。部活動には、高校生らに引けを取らないほど、心血を注ぎ、打ち込んでいます。それも部活動が日本一(?) 盛んな医科大学であるこの旭川医科大学ならではのことで。

学業面では、夏季休業前の講義から一変して、まだ入り口とはいえ専門的になっていく講義に四苦八苦しながら、それでもなんとか食らいついていこうと必死に取り組んできました。それが実を結んでいるかは実際世間に出てみないとわかりませんが、その過程は確実に自分の力となってくれています。今後、まだ入り口しか見えていないこの医師への学問を通過していく中で、また医師としての学問を生涯続けていく中で、この力は大きな役割を果たしてくれると信じています。

あとひと月もすれば、また次のステップへと歩みを進めることとなります。この一年間は環境の変化に対応していただけた、いわば受け身の状態でしたが、今後は能動的に、貪欲に知識や経験を吸収していこうと思います。

き、恵まれた大学生生活一年目を送ることができたと思います。

医学の勉強は、中学高校でやってきた理科や英語などと違い、今までやったことのない分野の勉強なのでいろいろ苦勞しました。理解を深めて自分で発展させていかなければならないことと覚えることの組み合わせ、そしてなにより量が多い。それでも、医学全体や医師になることを考えると一年生でやった内容はごく一部に過ぎないのだから、弱音を吐かず勉強しよう！と考える方がベターなのだと、今の私は思っています。先輩方から教えていただいた勉強方法や探してきた情報を活かして友達と一緒に悩んで解決していくことは、実は楽しいことなのだとチュートリアルや試験を通じて知ることができたのも良かったと感じています。

また、授業でわからないところを先生に質問に行くとき必ず質問以外の色々な話をしてくださり、OB・OGの医師の方々との交流の場も多く、知識だけでなく社会性を身につける場としても良い環境だと思いました。

実りの多い一年にしたいという思いで旭川にやってきましたが、歩んできた道を振り返ると一年前の自分が想像していた以上に素敵な一年でした。そしてまた春がやってきて、新しい仲間がやってきます。周りの方々に支えられて楽しい大学生生活を送ることができました。次は自分が支えられるように一生懸命頑張って日々過ごしていきたいと思っています。

一年を振り返って



看護学科第1年 黒木 香織

「看護師になろう」と決意したのが一昨年の10月。バタバタと、センター試験、二次試験、合格発表、入学……と時は過ぎ、気がつけば、二年生になろうとしています。

この旭川医科大学は私にとって二校目の大学となりますが、その大学生活は前回のそれとは様々な面において異なる様相を呈しています。まずあげられるのは、求められる自己学習の多さです。予習、復習をはじめ、課されるレポートの多さといったことはありません。そして、一般の大学と大きく異なる点は、看護技術学や基礎看護実習など、実践的な授業があることでしょうか。一年生では、最初に基礎看護技術学を学び、その後、一週間の基礎看護実習が行われましたが、そこでは、自分の知識の不足、技術の未熟さを目の当たりにしました。学んだはずのことが

思い出せない、自分が日にした患者さんの状態を正確に表現できない、伝えられない。患者さんの援助ができないばかりか、情報の共有すらままならず、もどかしく、悔しい思いが募りました。自分には、知識、技術、正確な表現力、観察力、など、多くのものが不足していると痛感しました。しかし、多くの患者さんと出会い、医療の現場を直に体感できたことはとても貴重であり、今後の学習や自分が医療に従事した際の礎にしていきたいと思います。

振り返ってみると、常に、「看護とは何か」と考えさせられた一年でした。良い医療人とは、知識・経験（技術）・人間性のバランスが取れた人であり、そして、看護ほど自分という人間性の現れる仕事は他にないといえます。そこに至るまでの道のりは険しく、辛いことも沢山あるでしょうが、だからこそ、学校での授業や自己学習を始め、その他、様々な活動に積極的に取り組んでいきたいと思います。そして、出来ないこと、足りないものを一つずつ補いながら、同じ目標を持つ仲間たちと切磋琢磨し、残された時間を有意義に過ごしていきたいと思います。

一年を振り返って



看護学科第1学年 杉岡 詩織

早いもので4月に入学してから1年が経とうとしています。今思えば、この1年間は毎日が新しいことの連続であっという間に過ぎ去っていったなと思います。

入学してから夏休みまでは、不慣れた大学生活や一人暮らしに戸惑い辛いこともありましたが、大学で出会った新しい友人たちと楽しい日々を過ごしているうちに怒涛のように過ぎ去っていきました。

夏休みが明け、大学生になって初めてのテストを迎えました。初めてのテストに不安でいっぱいでしたが、友人や先輩と励ましあいながら最後まで頑張り抜くことができました。

そして、後期となり、初めての実習が行われました。実際に病院で実習を行うと、わからないことだらけで自分のいたるなさを痛感しました。そのような実習でしたが、多くの患者さんや看護師さんと出

会い、人に看護するというこの難しさもやりがいも学びました。実習中にある患者さんから「この仕事は人の命がかかっているから大変だ」と言われました。私は、その言葉を聞いて医療職は人の命がかかっているととても難しい仕事なのだということに改めて自覚し、より積極的に勉強や看護技術の練習に励まなければいけないと思いました。

実習が終わるとレポートにおわれる日々が続く、気がついたら冬休み、後期試験になったように思います。

このように私の旭医学生としての1年はあっという間に過ぎ去っていきました。1年前の私にとって看護師という仕事はあこがれでしかありませんでしたが、この1年間で夢が少しだけ現実に近づいたと思います。来年度からはより多くの専門的な内容を学ぶこととなり、テストや実習も大変になると思います。この1年で学んできたことを土台とし、これからも多くのことを吸収していきたいと思います。

残りの3年間もあっという間に過ぎ去っていくと思いますが、1日1日を大切に、充実した大学生活を送っていききたいと思います。



定年退職にあたって

病理学講座 腫瘍病理分野 教授 小川 勝 洋

平成21年3月31日をもちまして定年退職することとなりました。昭和63年4月1日付で病理学第一講座（現在の病理学講座腫瘍病理分野）の第2代目教授（第一代目は、故 下田晶久教授）を担当することになって以来、21年間在職したことになります。本学に採用いただき、多くの方々にご支援ご協力いただきながら存分に仕事をすることができましたことに深く感謝申し上げます。

教育の面では、この間2000人以上の学生に対して病理学の講義をしてきたことになり、最初の頃の学生はすでに40代の脂ののりきった医師・医学者として頼もしく活躍しております。その中には病理学の分野に進んだ人も数多く出て斯界で活躍していることについてもうれしく思います。いろいろの機会でお話してきましたが、病理学は空港でいうと管制塔のようなもので、医療の良し悪しは病理次第で決まると言っても過言ではありません。今後も病理学マインドを持った医師・医学者が数多く育ってくれることを期待します。学生生活では競技スキー部、合唱部などの顧問をして多くの学生と楽しく過ごしてきました。学生の方々は何でも良いですからトップを目指して頑張ってください。

私の研究のテーマは『癌は生体の中にどのようにしてできてくるのか』ということですが、これは裏返せば『どうすれば癌にならずにすむか』ということになります。この課題に取り組んできてかなりの成果を上げることができたものと自負しておりますが、それでも私のできたことは微々たるものです。このテーマは永遠のテーマであり、若い方々がさらに発展させてくれることを期待します。

21年間の研究生活を振り返ると歴史的変革の時代を過したと思います。特に大きかったものの一つはITの進歩で、ITは科学の世界に大きな変革をもたらし、新しい科学情報がたちまちに地球上のどこからでもアクセスできる時代になりました。しかし、

情報があまりにも多すぎて情報に振り回されて自分を見失うことにもなりかねない時代で、自分の足場をしっかりと構え、そこから世界を見つめることができます大切だと感じています。また、今ひとつはゲノム情報で、多くの生物のゲノム情報が解明され、そのデータベースを活用して研究ができるようになり、生命科学の研究はますますおもしろい時代を迎えています。若い人たちには生涯に最低一度は研究に没頭する時期を持つことをお勧めします。私も研究は迷惑にならない程度に続けるつもりでいます。

大学の管理運営に関しては、平成15年から図書館長・学長補佐、平成16年からは副学長として関ってきました。図書館長時代で大きかったことは、電子ジャーナルの充実と機関リポジトリAMCoRの立上げでした。本学は図書予算が図書館に集約していたことが幸いして電子ジャーナル化の推進が比較的容易でしたが、予算面で配慮いただいたことも大きかったと思います。おかげで図書館の利用方法が大きく変わり、各自のPCが高度機能を備えた図書館になった感があります。また、AMCoRは本学が蓄積してきた研究成果・教育材料を社会に発信して行くという意味において本学のあり方に大きな変革をもたらす可能性があります。平成16年から本学は国立大学法人となりましたが、その準備にも関わってきました。法人化は大学改革の良いきっかけでしたが、厳しい評価を受けることや大学予算が縮減されるという大変困難な時代を迎えました。本学には他の大学にはない様々な特徴がありますのでそれらをおおいに生かして難局を乗り切っていただきたいと思います。

最後になりますが、今後とも旭川医科大学が日本の北にきらりと光る大学であり続けることをお祈りします。長い間ほんとうにありがとうございました。心よりお礼申し上げます。



定年退職にあたって

外科学講座 消化器病態外科学分野 教授 葛西 眞 一

本年3月31日をもって、いよいよ定年退職を迎えることになりました。昭和50年4月1日の辞令で旭川医大に赴任してから33年が過ぎることになり、誠に月日の過ぎるのは早いものと実感しております。振り返ると、初代教授水戸先生、助教授故関口先生（前北海道血液センター所長）、江端現札幌徳洲会名誉院長、草野現昭和大学外科教授と小生の5人が北大より着任し、教室の立ち上げに取りかかり、昭和51年11月1日の病院オープンに合わせて全スタッフ11人が揃い、不安と期待に緊張しつつ開院を迎えましたのも昨日の事の様です。開院初日はみぞれ混じりの寒い日に玄関前でオープニングセレモニーが行われ、その日の道新の夕刊には、予想よりも少ない外来数70余名と報じられていました。最初は両外科合わせて50床で始まり、2年後に単科44床でフル稼働体制となりました。当時の手術記録をみると、記念すべき第1例目が乳腺の生検を小生がやった事になっていました。オープンしたての手術場の使い始めて緊張してやった記憶があります。3年後には手術件数も270件程度となり、昭和54年にはいよいよ待望の一期生が加わり、本格的な新しい教室づくりが始まりました。大学の使命である教育・研究・診療の三本柱の幹を太くするべく、教室が一丸となってその伝統づくりに無我夢中で歩み出しました。卒業生も始めの頃は何をすることもサンプルのない初めての事で、何かととまどいの多い事ではあったのですが、誕生したての我が大学を何としても立派に育てあげようとの、その若々しいエネルギーに満ちあふれた自由闊達な気風はそのまま伝統らしさに育っていきました。卒業生も毎年5～6人ずつ増え、地域医療の応援と臨床研修を兼ねた大学を中心としたローテーションにより旭川医大も少しづつ認知されていきました。初めの頃は、地方で旭川医大の話をしていても全く通じず、旭川市内の民間病院の方が有名で、寂しくまた悔しい思いをしたものです。

教室の開講8年目に日本移植学会を主催する機会に恵まれましたが、学会といえば某宗教団体の催しものと勘違いされる有様で、世間の医学、医大の認知度はその程度だったのです。

遅々とした歩みの毎日からは、変化の大きさは感じられませんが、10年、20年、30年という節目で見ますと、医療を取りまく環境の変化とともに、我々の周辺も大きく動いていることに気づかされます。「名義貸し」という我々にとっては全く不本意な出来事でひどい医局バッシングの洗礼を受け、続く新卒後臨床研修制度や国立大学の法人化、医療費亡国論などで大学の医局は厳しさを増し、地域医療の支援に支障を来すようになり、今や大学の使命を全うする事が大変困難になってきました。地方の町・村長さんが、私達は何年待てば大学からの医師を派遣して貰えるんだと悲痛な声で訴えていかれます。もう少し待って下さいとの御返事も十分に果たせぬままになっています。地域医療を支えるという本学の使命は極めて厳しい状況にあります。開学30年余りにしてこの様な医療環境を迎えることになろうとは、誰が予測しえたのでしょうか。

奇しくもこの厳しい環境の中で、我々は自分たちが育んできた一期生の学長を、全国で初めて迎えることができました。この事は、卒業生のモチベーションを多いに燃えたたせたのではないのでしょうか。今や多くの卒業生が国内・外の第一線で活躍しています。新入生の地域出身枠も大幅に増えました。今こそ、この若いエネルギーに大学の再生を託し、この危機を乗り越えられる様多いなる期待を寄せたいと思います。

最後に、公私ともにこれまでに頂いた皆様様の暖かい御支援・御厚情に心より感謝と御礼を申しあげ、幸多からんことを祈念申しあげまして、退職の御挨拶とさせていただきます。誠にありがとうございました。



退職にあたって

脳神経外科学講座 教授 田中達也

平成21年3月31日付で、定年退職を迎えます。昭和53年4月1日に本学脳神経外科の初代教授米増祐吉先生のもとに、講師として九州より赴任してから、31年になるようとしています。鹿児島で生まれ、福岡で学生時代を過ごした自分に、日本で最北端の医科大学がある極寒の旭川で生活できるのだろうかとても不安でした。しかし、旭川での生活に慣れてみると、春夏秋冬がはっきりと日に映る素晴らしい自然と、人情の厚い土地柄にすっかり馴染んでしまいました。私の専門は、機能的脳神経外科学ですが、北海道には脳血管障害と、進行性の脳腫瘍の症例が多く、旭川に来てからは多くの症例を経験させていただきました。私の得意な、正常脳機能を温存する機能的脳神経外科の知識をおおいに活用させて、ニューロナビゲーションを用いて、可能な限り脳の正常機能を温存する手術を行いました。平成9年11月に、米増教授のご退官後の脳神経外科を担当させていただくことになりました。脳血管障害、脳腫瘍、小児脳神経外科、機能的脳神経外科、先天奇形、脳外傷、血管内外科と、道北・道東で唯一の医科大学における脳神経外科の守備範囲はとても広く、少ないスタッフでカバーするのはとても大変でした。この厳しい環境の中で、一騎当千の有能な教室員がたくさん育ってくれました。特に、3年前から稼働した救急部と周産期母子センターとの連携で、多くの困難な症例を助けることができました。私の専門分野でもある、てんかんの外科治療は、発作消失率が75%と国際水準に達して、国際的なてんかんの教科書(米国)にも、旭川医科大学てんかんセンターとして記載されました。てんかんの基礎研究も地道な努力を続けましたが、教室から日本てんかん学会の学会賞である、Juhn & Mary WADA奨励賞を3人受賞できたこともうれしい思い出です。これも、ひとえに旭川医科大学の関連科の諸先生方をはじめ同門の先生方や関連病院の真摯なご努力とご協力があったからこそ、初めて可能になったことと、心より

感謝しています。しかし、新臨床研修医制度が施行されてからは、若い人材確保は、大変な状況になっています。特に、くも膜下出血、脳出血、脳外傷、小児救急などの救急医療や、脳ヘルニア寸前の直径7cm以上もあるような巨大脳腫瘍の手術は、24時間いつでも発生します。手術に割かれる医師の残り、診療、教育、研究と大変忙しい毎日を送りました。しかし、楽しい思い出もたくさんできました。基礎研究棟の8階教授室の真正面に、素晴らしい大雪連峰と十勝連峰が連なっています。雲一つない晴天の時は、四季折々の大雪山の写真を、窓を広く開けて撮影し、千枚以上のコレクションになりました。また、正面手前には、グリーンヒルテニスクラブが目飛び込みます。当然テニススクール(夜8時からのコース)に入学しました。時間が十分に取れず、月に3回位しか受講できませんでしたが、土野コーチの激しい特訓に耐え、旭川市民大会の市政100周年記念大会で3位、北海道ドクターズ大会で優勝しました。まぐれも手伝っての記録だと思っています。

平成17年からは、私が日本でてんかん学会理事長に選ばれて、国内・国外の出張が飛躍的に増加しました。ところが、救急医療の増加も相まって、手術件数も右肩上がりに増加してきました。留守隊は病院での重責を立派に果たして、しかも病院運営での脳神経外科の診療成績を上方に更新しています。日夜の激しい勤務にもひるむことなく、道北・道東の脳神経外科医療を守るためにひたすら努力してくれた旭川医科大学卒業生で、旭川医科大学脳神経外科をこよなく愛している教室員には、心より感謝しています。大学も大学法人となり、昔の旭川医科大学とは大きく様変わりしてきましたが、道北・道東の医学教育、研究、地域医療並びに高度先進医療の要として、益々発展されることと思います。31年にわたる皆様のご厚情とご支援に心より感謝と御礼を申し上げます。



最終講義が 行われました



本年3月31日(火)をもちまして定年退職されます、外科学講座消化器病態外科学分野 葛西眞一 教授の「消化器外科30年の歩みを振り返って」と題しました最終講義が2月26日(木)15時00分から、病理学講座腫瘍病理分野 小川勝洋 教授の「生体内における癌の成り方」と題しました最終講義が2月27日(金)15時00分から、看護学科棟大講義室において開催されました。また、脳神経外科学講座 田中達也 教授の「てんかんの外科治療—基礎研究から臨床へ—」と題しました最終講義が3月10日(火)14時00分から臨床講義棟第3講義室において開催されました。

それぞれの教育・研究・診療を振り返りながらの最終講義には長い間の貴重な経験を基に、これからの旭川医科大学に向けたエールを感じることができました。講義の最後には、様々な場面でお世話になった学生・職員から沢山の花束が贈られ講義室をあとにされました。



外国人留学生冬季交流事業が実施されました

平成20年度外国人冬季交流事業が、2月12日(木)・13日(金)の両日にわたり、本学に留学している学生とその家族及び関係事務職員、並びに本学に研究者として在籍する外国人とその家族の計27名が参加し実施されました。



これは、冬の北海道の名物である流氷と代表的なイベントである氷瀑まつりを見学してもらい、北海道の厳しい寒さと大学近郊の特徴に理解を深めながら、温泉施設に宿泊し他国の留学生同士の交流及び外国人留学生と教職員との交流を図ることを目的としたものです。



今回、参加いただいた外国人の方々の国籍は、韓国・中国・タイ・モンゴル・イラク・エジプト・カメルーン・フランスの8カ国にわたり、国



際色豊かな交流事業となりました。

当日は朝バスで紋別市へむかい、オホーツクタワーを見学後、流氷砕氷船に乗りました。流氷を観るのは初めてという方がほとんどで、数日前に着岸したとの情報もあったことから楽しみにしていましたが、あいにく流氷は風に押し戻され、遙か遠くに行ってしまい、残念ながら肉眼で観ることはできませんでした。その後、氷瀑まつりが開催されている上川町層雲峡温泉へむかい、宿泊施設にて夕方から開催された交流会では終始和やかな雰囲気というよりは大変賑やかな中で情報・意見交換が行われました。

平成20年度 1年のあゆみ



入学式
4月4日(金)

医学科入学者	90名
看護学科入学者	60名
看護学科3年次編入学者	10名

**新入生
合同研修会**
4月7日(月)
8日(火)



BLS+AED



手話の演習



健康チェック

**第33回
医大祭**
6月13日(金)
14日(土)
15日(日)



ゲームコーナー

**第55回
北海道地区大学体育大会
(分担種目バスケットボール)**
7月4日(金), 5日(土), 6日(日)



古本市



フリーマーケット



表彰式



競技風景

音楽の夕べ
7月26日(土)



室内合奏団



競技風景



合唱部

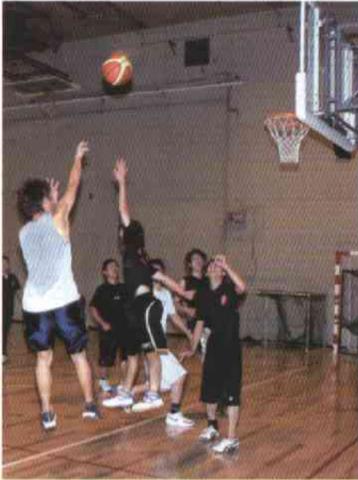


ギター部



ブラスアンサンブル

平成20年度 1年のあゆみ



バスケットボール

体育大会
8月27日(水)



ハンドボール

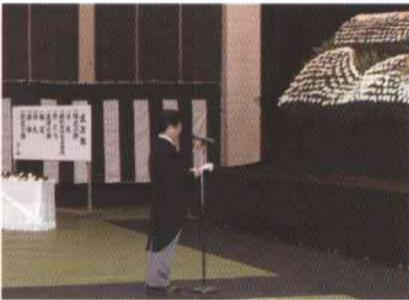


バレーボール



サッカー

解剖体慰霊式
9月17日(水)



医学科第2年次後期
編入学生入学式
10名
10月1日(水)



学生リーダーシップ賞表彰
1月9日(金)



クリスマス
コンサート
12月13日(土)
12月20日(土)



合唱部

ニューイヤー コンサート
1月17日(土)



室内合奏団



プラスアンサンプル



学位記授与式
3月25日(水)

医学科	101名
看護学科	68名

各種保険について

本学が薦めている保険の概要は、下記の図のとおりです。

③ 学研災付帯学生生活総合保険A・Bタイプ ※3階部分	
内容	傷害・損害賠償を24時間補償&針刺し事故を補償
補償金額	死亡補償金 Aタイプ Bタイプ 300万円 対人賠償 Aタイプ・Bタイプ 1億円限度 対物賠償 Aタイプ・Bタイプ 1億円限度 感染予防費用 保険期間中50万円
掛金	学生生活のしおりを参照してください。
加入の是非	看護学科/医学科第1～4学年 任意加入 医学科5・6学年 加入を義務付けている(臨床実習のため) ※学生教育研究災害傷害保険及び医学生教育研究賠償責任保険(医学賠)に加入していること。
② 医学生教育研究賠償責任保険(医学賠) ※2階部分	
内容	正課中、学校行事中、通学中に、他人にケガをさせたり、他人の財物を壊したことにより被る法律上の損害賠償を補償
補償金額	対人賠償と対物賠償合わせて 1事故につき1億円
掛金	6年間 3,000円 4年間 2,000円※1年間500円
加入の是非	入学時加入を義務付けている ※学生教育研究災害傷害保険に加入していること
① 学生教育研究災害傷害保険(学研災) ※1階部分	
内容	正課中、課外活動中、通学中及び学校行事中に本人が傷害等の事故にあった場合
補償金額	死亡補償金 正課中 2,000万円 課外活動中 1,000万円 傷害補償金 正課中 治療日数4日以上から 課外活動中 治療日数14日以上から 入院 1日 4,000円
掛金	6年間 5,400円 4年間 3,900円
加入の是非	入学時加入を義務付けている

詳細については、学生支援課学生係にお尋ね願います。

本学では、学生諸君の学生生活及び日常生活に対して上図のような保険を用意して、加入を薦めております。

①学生教育研究災害障害保険(学研災)は、学生生活中に負った本人の傷害等の保険です。加入を義務付けております。

②医学生教育研究賠償責任保険(医学賠)は、学生生活中に他人から損害賠償を求められた場合の賠償補償保険です。加入を義務付けております。

③学研災付帯学生生活総合保険A・Bタイプは、日常生活24時間をカバーする傷害保険と賠償補償保険です。加入は任意ですが、医学科5・6学年は臨床実習に備え加入を義務付けております。

平成21年度日本学生支援機構奨学生の募集について

日本学生支援機構は、優秀な学生で経済的な理由で就学困難な者に学資を貸与しています。

本学では、日本学生支援機構からの推薦依頼に基づき、出願者の種々の条件を考慮して選考を行い、日本学生支援機構へ推薦します。ただし、日本学生支援機構では奨学金貸与の種別ごとに推薦基準が定められており、その資格があっても採用枠の関係で推薦できない場合があります。

平成21年度の募集説明は4月15日(水)午後5時から看護学科大講義室において実施します。希望者は必ず出席してください。

なお、募集の時期以外に家計の急変により、学資の支弁に困難な事情が生じた場合は、学生支援課学生係に相談してください。

平成21年度 前期分授業料免除及び延納・分納について

平成21年度前期分授業料免除及び延納・分納を希望する学生で、免除基準のいずれかに該当すると思われる者は、学生支援課学生係にて必要書類を受け取り、申請期限までに提出してください。

免除基準の概要はつぎのとおりです。

○経済的理由で授業料納入が困難であり、かつ学力優秀と認められる場合

○授業料納期前6か月以内において学資負担者が死亡、又は風水害等の災害を受け、授業料納付が著しく困難であると認められる場合
なお、このことについては、公用掲示板にも2月13日(金)より掲示してありますので確認してください。

また、不明な点は、学生支援課学生係に問い合わせ願います。

申請期限 在学生 平成21年3月31日(火)

新入生 平成21年4月13日(月)

※授業料滞納者の授業料免除申請は、受理できませんのでご注意ください。

授業料未納による除籍について

授業料を2期滞納し所定の期日までに納入されない場合には、除籍となります。

この取扱いは、平成17年度から適用されていますので、平成21年4月1日において授業料を2期以上滞納している場合、平成21年9月30日をもって除籍

となります。

以後授業料納期である6か月ごとに適用されますので、授業料の支払計画をきちんと立てるようご留意ください。

(学生支援課)

新入生歓迎合宿のご案内

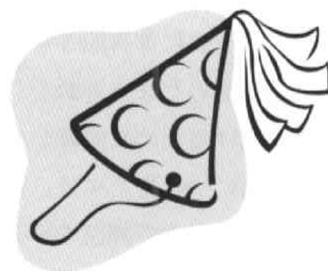
新入生歓迎実行委員会

皆さん、ご入学おめでとうございます。我々、新歓委員は右も左もわからないであろう新入生の皆さんのために新入生歓迎合宿というものを用意しています。日程としては、入学式の翌日からなので4月11日(土)、12日(日)に行います。気になる内容についてなんですけど、まず、学内では大学見学、部活紹介、出店といった行事があります。ひとつずつ補足していきますと、大学見学では一年生が使う教室などを私たちが案内します。部活紹介はその名の通り数多くある部活が皆さんを勧誘しようと趣向をこらした部の発表をしてくれます。出店というのは部活などに自分のメールアドレスを教えたりする感じですね。そこで沢山の部活に〇〇書いておくと後々いいことがあるかもしれませんよ??

続いて、ビューサイドホテル「時屋亭」に場所を移動します。そこでは、みんなで食事したり盛り上がったりと新入生同士の距離がぐっと縮まること請け合いです。また、大学よりもさらに積極的な「乱入」という部活の勧誘があるので気になる部活にはどんどん顔を出してみてください。

ここで書いてだけではどんな行事かまだつかめな

いということも多いでしょうが、この新歓合宿に参加したことがきっかけで仲の良い友達を見つけたり、自分にあった部活を決めたりした先輩も沢山いるようです。参加して後悔させることのないように我々新歓委員は入念に準備をしてきました。ぜひ参加して旭川医科大学での生活を楽しいものにしてください!!



訃報



本学名誉教授原田一典氏（享年82才）には、平成21年1月18日（日）ご逝去されました。

ここに謹んで哀悼の意を表します。

同氏は、昭和51年4月1日本学一般教育（歴史）教授に就任され、平成6年3月31日

定年により退官、同年4月1日本学名誉教授の称号を授与されました。この間、永年にわたって、教育・研究に従事し、本学の発展に多大な貢献をなされました。

特に、学術研究面では日本近代史の分野において、北海道地域史、とりわけ近代以降の北海道開拓の歴史、札幌市及び旭川市の歴史の研究に尽力されました。日本史・世界史と北海道史との間に有機的関連を求めるその独創的な研究手法は高く評価され、後続の若い研究者に多くの指針を与えました。

また、旭川市史編さんの顕著な功績により平成3年11月に旭川市文化奨励賞、平成15年11月に旭川市文化賞を受賞されました。

この度、生前の功績により、正四位瑞宝中授章を授賞されました。

（総務課）

教員の異動

◇H21.2.1

昇任 病院集中治療部

准教授 小北 直宏

◇H21.3.1

昇任 病院集中治療部

講師 岡田 基

学生団体の「継続届」「設立届」の提出について

平成21年4月以降に学生団体活動（部活）を継続する団体の責任者は、4月中に「学生団体継続届」を学生支援課学生係に提出して下さい。なお、継続届を提出しない団体は活動を停止したと判断し廃部とします。

また、新規に学生団体の設立を希望する学生は

4月中に学生支援課学生係に「学生団体設立届」を提出して下さい。なお、設立届の提出時に活動内容等に関する説明を求める場合がありますので「活動内容が同じ様な団体がある」等、安易な団体設立は避けて下さい。各届出用紙は学生支援課にあります。

貴重品保管庫を設置しました

この度、学生玄関ロビーに貴重品保管庫を設置しました。

これは、土足解禁となりシューズロッカーが廃棄されたスペースに体育館等を使用する学生が更衣室に貴重品を置いたまま運動をした場合に紛失等のトラブルを避けるために設置したものです。

使用方法につきましては、保管庫付近に説明書が貼ってありますので熟読のうえ使用して下さい。なお、ナンバーロックのため個々に鍵が付いておりま

せんので自分で設定した番号を忘れずに使用して下さい。（扉を開ける時、3回連続で間違えると爆発します。……ウソです。）

本来、貴重品は個人のロッカーで保管すべきところですが、通常身に付けているような小物などのうち貴重品を一時的に保管するための保管庫なので、他の使用者の迷惑となるような個人的な占有（長時間の使用）は避けて下さい。